

## 2017 年度特定研究奨励金 報告書

### 報告者所属・氏名

所属	文学部英文学科	氏名	深瀬 有希子
----	---------	----	--------

### 奨励金による研究活動・実績（具体的に記載）

本奨励金による研究は、19 世紀アメリカ合衆国の元奴隷で、後に政治家・思想家として活躍した、フレデリック・ダグラスによる講演活動に注目し、彼が白人エリート文化圏に参入する際に用いた民族誌的修辞を分析することを目的とした。

研究期間前半では、基礎的作業として、19 世紀の高等教育で使用されていた演説集 *Columbian Orator* (1797) の精読を行った。ここで確認されたのは、読み書き能力を習得することを禁じられていた奴隷ダグラスが手本とした文体とは、ジョージ・ワシントンなどのアメリカ合衆国の先人による演説だけではなく、ギリシャ・ローマの哲学者が用いた演説でもあったという点である。それは、「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれて後に正典化された同時代の白人作家・思想家たちが、共和国アメリカの理念をギリシャ・ローマに求めた姿と共通する。

付随的な収穫として、上記書物の編纂者であるケイレブ・ビンガムが、19 世紀女子教育のための英語文法書も編纂していたこともわかった。ダグラスは奴隷解放運動と女性解放運動との双方に関わったが、その活動を間接的に支えたビンガムの文学者・社会活動家としての役割は、今後、興味深い研究対象となりうるだろう。

研究期間後半では、「ライシーアム」という講演活動の具体的な軌跡を追った。研究計画を執筆していた当時には予想していなかったが、重要な作業として、ダグラスと、19 世紀後半の演説家として名高かった作家マーク・トゥェインとの交流の軌跡を追った。トゥェインの妻を媒介にして構築された二人の親交については、管見する限り、国内では論じられてこなかったのではないかと。両者の影響関係を確認するために、2018 年 3 月中旬に、トゥェイン研究の最重要拠点である、University of California Berkeley Mark Twain Papers を訪れ、インターネットでは入手できない書簡や写真、また 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのアメリカ文学文化関連の資料を収集した。

上記の活動を経て、現在の段階での結論および仮説は以下の通りである。ダグラスはその経歴の前半（南北戦争前）では、古くはギリシャ・ローマ共和制における自由に関する修辞を習得し、それを切り札として用いて白人エリート文化圏に登場した。さらに、人生の後半（南北戦争後から南部再建時代）においては、他方、民衆文化の代表といえるトゥェインの文学が追求したアメリカの自由に対する「ブラック・ユーモア」的修辞をも吸収し、民族誌的自己成型をなしとげたのではないかと。